

Japan Geoscience Union Meeting 2011

(May 22-27 2011 at Makuhari, Chiba, Japan)

©2011. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.



GHE024-07

会場:301A

時間:5月22日 15:45-16:00

地球惑星科学史の叙述法 1960年代の都城秋穂の場合 How to Describe the History of Geoscience: MIYASHIRO Akiho's Essays in the 1960s

山田 俊弘^{1*}

Toshihiro Yamada^{1*}

¹ 千葉県立幕張総合高等学校

¹ Makuhari Sogo High School

著名な日本人地質学者の都城秋穂(1920-2008)は、1960年代の半ばに「地球科学の歴史と現状」というエッセイを雑誌『自然』に15回にわたって連載した(1965年9月~1966年11月)。これら一連の文章は、西洋地学史・日本地学史から科学思想一般、地学の哲学、社会的な性格づけ、科学者のライフサイクル、地学教育まで、縦横に論じて飽くことがない。現代史の貴重な文献であるとともに、今日読んでも刺激的かつ啓発的な内容を含んでいる(2009年単行本として死後出版された)。

もとよりすぐれて批評的な論考であり、「歴史を語ることで自分が目的だったのではない」(連載第15回)ののだが、当該科学分野の動向に従事者としてアクチュアルにとらえると同時に、歴史記述についてもきわめて洞察力に富んだ指摘を行っている。ここでは三つの側面に焦点を当てて再構成してみたい。

第一に物理科学としての側面である。地学の対象が自然物として物理法則に従うことは確かであり、20世紀に発展した物理学を果敢に取り入れてこそ新学発展も望める。実際、19世紀後半以降数理科学の精緻化とともに地球物理学諸分野がディシプリンとして確立されてきたが、地質学の伝統的分野においてこの傾向がどのように展開されてきたか、いわば「侵入史」として振り返ろうとする(第6回)。おそらくこの「侵入史」という言葉に当時の地質学者に共有された強烈な問題意識を見ることができる。しかし物理学に還元されない地学の要素があるとしたらそれは何なのか。

そこで第二の歴史科学の側面に目を転じる。都城はドイツ歴史学派の流れ(本来の歴史主義)に言及しつつ、英国のライエルらの斉一主義による地史学を「歴史中心主義」と規定する。いずれも地質学の発展と密接な関係を持った思想である。そして前者における非合理主義的傾向を指摘することから翻って、同時代の「歴史主義者」舟橋光男を批判する(第7回)。ここにはマルクス主義理解の問題もはらまれている。結局都城は比較的穏当な歴史的個性として地学の対象を描き、「類型的な歴史的法則」を認めている(第8回)。

第三に着目したいのが地理科学の側面である。都城によれば、歴史的に形成された個々の地域も個性を持つ以上「地域性あるいは地理性」を抜きに地学の対象を語りえない(第8回)。都城が地学研究の「地方主義(provincialism)」(第4回)とか「地域主義」(第15回)をいうときにはネガティブな響きを伴うが、地理的特異性が地学的対象の「本質的な構成成分」という認識を確固として持っていた(第8回)。学問としての地理学の復権をも示唆している。後進国科学史の意義を理解していた点(第5, 12回)から見ても、萌芽的とはいえ彼の地理学あるいは地政学的関心を見落とす手はないであろう。

都城はまた科学的概念が歴史的社会的に形成されることから、「概念の歴史的批判」の必要性を主張し(第9回)、「地質学上の先人の業績」を学ぶことの重要性を理解していた(第11回)。都城科学論は科学史記述だけでなく、科学教育における人文主義的教養のあり方にも示唆を与える。

キーワード: 科学論, 現代史, 物理科学, 歴史科学, 地理科学, 都城秋穂

Keywords: science study, contemporary history, physical science, historical science, geographical science, Miyashiro Akiho